

財布を飼う



葉山ユタ

お金が無い

お金が無い。

先月、バイト先を上司とケンカして辞めてしまった。わずかばかりのバイト代が振り込まれたが、家賃や携帯代を払ったら、もう無いも同然だ。

就活はしているものの、まだ仕事が見つからない。このご時世、正社員の口はなかなか無い。もっとも、それは特に自慢できるスキルも無い自分のせいでもあるが。

家に居てもする事が無いし、少しは体を動かそうと、近場の商店街まで散歩に出て来た。お金が無いので、何か買うわけではない。まあウィンドー・ショッピングだ。

商店街の寂れた一角に、これまた寂れた骨董屋があった。と言うか古道具屋だろうか。

いずれにしても流行っている様子は無く、ひっそりした佇まいだ。存在は知っていたが、今まで一度も中を伺った事は無かった。

曇った出窓のディスプレイに、インドの神様の像や水晶の玉など、およそ一般家庭では必要とはされないであろう品物が飾られている。店内には書画なども置いてあるようだ。

こんなんでもやって行けるのかな？月に幾らくらい稼げるんだろう。大体、営業しているのか？看板すらろくに読めない状態になってるぞ。

何か稼げる方法は無いかと始終考えているせいか、すぐ他人の懐具合を忖度する癖がついた。

埃で白く曇ったウィンドウの中をしげしげと眺めていたら、向こうからも自分を見つめている目に気が付き慌てた。

木製のドアがギギッと開き、青い古びたワンピースを着た白髪頭の小柄な老婆が、にっこり笑って出て来た。

「どうぞ、中に入ってゆっくり見て下さい」

何も買う気など無いのだが、温和そうな老婆と対面していると何だか断りづらく、フラフラと後について店内に入ると、意外に中はさっぱりと片付いて、扱っている商品も上等そうで品が良かった。

なるほど、これは金持ちの固定客のいる店だな。店主とすっかり親しくなった馴染みの客が定期的に何か買ってくれるんだ。

ぼくは心の中で勝手な想像をし、断定した。

買う気も無いのに、懐中時計を眺めたり古いポストカードを手にとってみると、店主であろう先ほどの老婆が聞いてきた。

「お兄さん、何か欲しい物は無いの？」

自慢じゃないが欲しい物なら山ほどある。

もう物欲の塊だよ。でも、今欲しいのは仕事と金だけだ。

と言う心の声はしまっておいた。

「いやあ、こういう物は面白いとは思うんですけどねえ...」

と言葉を濁した。

すると老婆は心配そうな顔をして言った。

「そう？失礼だけれど、あなたお財布はちゃんと持っていますか？」

「財布ですか？持ってますよ。中身はあんまり入ってないけど」

変な質問だと不審に思ったが、金が無いから何にも買わないよ、と言うニュアンスを軽く含めて答えた。

老婆は気を悪くした風も無く、また心配そうな顔をして言った。

「お財布って大事なのよ。運気の悪い時はお財布を変えると運が上がるの。特に金運が悪い時はね」

「ああ、聞いた事ありますねえ」

すると何かい、ぼくが貧乏そうに見えるって事かい？そりゃまあそうだよ。その通りだから、今は財布なんか買っていないのだ。

財布よりもその中身が欲しい。

ぼくが目を泳がせながら店を出るタイミングを計っていると、老婆は店の奥から、何かをいそいそと持ってきて僕に見せた。

「ほら、このお財布素敵でしょう？」

見るとキャメル色の革の長財布で、しっかりした造りの上等な品だった。

新品ではないようだが、これと言って傷みは無く、自分の使っている安物の二つ折り財布とは全然違う。

余裕があればこんな高級そうな財布も欲しいけれど、今は何と云っても緊縮財政下なのである。

贅沢は敵だ。

「そりゃ素敵ですが、中古と言っても高いでしょう？」

「千円でいいわ」

「せ、千円？だけ？」

あまりの安さに、ぼくは拍子抜けした。

財布を買う

「質の良いイタリアの革を使っているのよ。ウチの昔からのお客様で貿易商の方の持ち物だったんだけど、手違いで同じ物を二つ買ってしまったからって、その一つをまだ新しいうちに持ってきてくれたの。お兄さん、お財布はね、お金が好きなの。だからお金持ちが持っていたお財布はお金を呼び込んでくれるのよ」

何と言う商売上手な老婆であろうか。

いや、もしかしたら貧乏そうなぼくを憐れみ、超特価で譲ってくれるのかもしれない。老婆の「金運が上がる」と言う言葉が、じわじわとぼくの脳に染み込んでくる。

「頂きます」

結局ぼくは、なけなしの千円を支払い、その財布を買った。

老婆は、しわくちゃながら形の良い手で綺麗な紙箱に財布を収め、丁寧に包装してくれた。

「なるべく沢山お札を入れるのよ。お財布が淋しがるから。千円札でもいいから沢山入れてあげてね。それと、お金が欲しいなら、何かしら行動しなきゃだめよ」

この老婆は魔女だろうか？

何だか胸の内を見透かされているようで、恥ずかしいやら怖いやら、ほうほうの体でぼくは店を後にした。

家に帰って座布団に座り、買ってきた財布の包装を開けると、新品でもないのに、革のいい匂いがふわりと周りに漂った。改めてそのキャメル色のしなやかな長財布を手にとって、あれこれ調べる。

財布の事も革の事も良く知らないが、それがとても良い品だと言う事は分かった。まず、革がしなやかで美しい。縫製も丁寧だし、使われている金具にも凝ったデザインが施されている。ブランド物なのかどうか分らないが、見知らぬ西洋のエンブレムが小さく裏側に刻印されている。

これと比べると、今まで使っていた合皮のカジュアルなデザインの財布が、やけに貧相に見えてきた。

「まあ、大分くたびれてきてたから、いい取りかえ時だろう。しかし、沢山お金入れてあげてって言われてもねえ。口座の残高だって直視したくない状態なんだって」

独り愚痴りながら、ぼくは今まで使っていた財布から、その上等な財布にお金を移した。長財布は使うのが初めてだったが、札を折らずに入れられると言う感覚が新鮮だった。

「頼むぞ財布、お金を呼び込んでくれ」

ぼくは神に祈るように、両手で財布を頭の上に掲げてつぶやいた。

図書館にて

次の日、空はどんよりと曇り、冷たい秋風が枯葉を散らして寒かった。

家にいると何だかダラダラ過ごしてしまうので、バッグの中に、携帯電話、履歴書用紙、筆記用具と、例の財布を入れて外へ出た。

バッグとその中身に比べると、財布だけが豪華で何だか不釣り合いだった。

近所のコンビニに立ち寄り、レジ横に立ててあるラックから、無料の就職情報誌を一冊抜き取り、その足で区役所に併設されている公立図書室へ出かける事にした。あの婆さんの言うとおり、金が欲しかったら何か行動を起こさなければならない。昔、何かの本で読んだ事があった。金が欲しかったら、稼ぐか貰うか盗むしかない。

盗むのは論外なので、稼ぐか貰うかだが、いい歳をして誰かに小遣いをねだるわけにはいかないのだから、やはり稼ぐしかならなそう。まだ季節は秋だが、冬になって暖房費が嵩む前に仕事を決めなければ。いよいよ、気持ちは切羽詰まり悲愴になってくる。

寒くて腹が減って貧乏は最悪って、なんかの漫画で読んだな。

早く図書室に行って暖まろう。どうも寒いと気持ちが沈んでいけない。ぼくは日当たりの良い道を選びながら、足早に図書室に向かった。

平日の昼間でも、その図書室は結構込んでいる。

年配の人達が、日がな一日本を読みに来ているのだ。本も開かずソファに座ったまま、ぐっすり寝込んでいるじいさんもいた。

ぼくは、なるべく人のいない、広いテーブルの隅に席を取り、情報誌をめくり始めた。

不景気だ。

まず、就職情報誌自体が薄い。そして内容も薄かった。学生と主婦向けの短時間のバイトや、高待遇を謳う、掲載写真がギャルとギャル男ばかりと言う怪しい会社が多い。残りは資格の必要な専門職のバイトと肉体労働関係で、資格も無く非力なぼくは読み飛ばしてしまった。

以前勤めていたバイトは電話営業の仕事だったが、時給はそれなりに良かったのだ。

しかし営業自体が苦手だったぼくは、成績が芳しくなく、その事で上司に理不尽なまでの「指導」を受け、その日、大げんかになり辞めてしまった。辞めた事に悔いは無いが、一年近く働いていたのに、雇用保険すら掛けて貰えなかった事が悔しい。

財布とお金の幸せな関係

ぼくは諦めて、その雑誌をバッグにしまった。

その時ぼくの目に、例のキャメル色の財布が目についた。何だか輝いて見えた。

ああ、この財布に沢山お金を入れてあげたい。

ふと心に浮かんだ言葉だったが、それはまるで新しく飼った可愛いペットに、美味しいご飯を食べさせたいとか、快適な寝床を用意してあげたいと言った、慈しみの想いに似ていて、妙にほっこりと暖かな気持ちになった。

財布をペット扱いとはね。まあどこへでも連れて行けるし、扱いは楽だけど。ただ、餌が金ってのはネックだよなあ。

ぼくはバッグの中の財布を指先で撫でた。なぜだか分からないが、昨日手にしたばかりの財布に、ぼくは言いようの無い愛着を感じていたのだ。

あの婆さん、金持ちの財布は金が好きだから金を呼ぶって言ってたけど、もしかしたらこの財布は、持ち主を自分の為に働かせ金を一杯入れさせてご満悦になり、その結果、持ち主が金持ちになるって言う逆の図式なんじゃないのか？

だとしたら、金の持ち主は財布なのか人間なのか？変な考えに自分でも笑える。

でも、それでお互い幸せになるなら結構な事だ。こいつが自堕落になりかねない自分のストッパーになってくれるなら、それは単なる財布以上の価値が有る。

ぼくはこの財布を勧めてくれた老婆に改めて感謝した。

いつか、この財布が札で一杯になったら、その時はまたあの店で、何か買ってやろう。あの店の常連客になる自分の姿を想像して、顔がにやけてしまう。

ぼくは、もう一度就職情報誌を取りだし募集内容を読み始めた。まずは何か行動起こさないと。

何かを一生懸命行えば、きっと運も開けるし金も付いてくるってものだろう。

とにかく今は、出来る事からやってみないと。

募集広告をもう一度見直すと、小さなサイクルショップの店員募集が目についた。条件は良くないが、小さな写真に載っている店主の男性が、見事な福耳の持ち主だったのだ。

僕は日付と志望動機だけ空白で、あとはすっかり記入済みの履歴書を取り出し、今日の日付と、取ってつけたような志望動機を記入して封をした。

縁があれば採用されるだろう、ダメなら次を探ささ。

リサイクルショップ

リサイクルショップの店長は、事務所の応接用ソファに腰掛け、履歴書を前に悩んでいた。

長年働いてくれていたパートの主婦が、ご主人の転勤が決まったからと、慌しく退職し、経理を担当している店長の奥さんは腰痛が悪化して、毎日店に出るのは勘弁してくれと言う。

それだけでも仕事が手一杯なのに、残り一人の従業員である、フリーターの男の子が、郷里で実家の米屋を継ぎたいからと、今月末で辞める事になってしまった。

慌てて就職情報誌に広告を出してみたものの、自慢ではないが自分には、家具を見る目は有っても、人を見る目が無いのだ。

今まで自分が面接をして長持ちした従業員が一人もいないのである。

ベテラン主婦パートの目は確かで、彼女が太鼓判を押した人物は、みんな真面目で良く働き、顧客の評判も良かったのだ。

参ったなあ。取り敢えず、すぐに仕事を引き継いでくれそうな男性三人を面接に呼んでいるが、誰がいいのかさっぱり分からない。

店長は応接テーブルの上に履歴書を三枚並べて見比べた。

三人とも二十代の独身男性で、学歴も似たり寄ったり。そもそも、店長は学歴にはあまり拘りが無い。

家族で興した小さな会社だし、真面目にキチンと、健康的に働いてくれればそれでいいのだ。

人材に高望みはしていないし、それほど仕事がキツイとも思わないが、自分が面接して採用すると、初日だけ顔を出してそれっきりが二三人。

客が来ると避けて目を合わせない為、クレームになり辞めてもらった者もいた。

言い出したらキリがない。

就職難とは言われているが、いつも人手不足の業種もあるのだ。

「山上さんに面接だけでも頼みたかったなあ。山上さんは、どうして人の本性が分かるんだろう？俺は見た目だけで判断しちゃうのかなあ？」

店長は薄くなった白髪頭を撫でた。

山上さんとは、辞めてしまったベテラン主婦パートの女性だが、彼女は人間観察が得意で、特に女性の性格などは怖いくらいに見抜く人だった。

面接

店長、いいですか。履歴書の職歴なんて当てになりません。人間、最後は人柄です。表面上は優しく親切なのに中身は非常に利己的で、自分の為に他人を上手く利用するタイプの女性は、営業職にはもってこいだし売上も上げてはくれるけれど、逆に店の中がゴタゴタして周りの人が辞めたりするし、ヘタをするとその強欲さの為に店が乗っ取られる事もあるんですよ。

だから女性はよく観察し、どんなにきれいで可愛らしくても、強欲な人を採用してはいけません！

と教えてくれたのも山上さんだった。
大体表面上が優しく親切なら、強欲だなんて思わないじゃないか。どうやって見抜くやら？
まったく女は怖い。

主婦パートもおいおい採用したいが、それは女房にまかせよう。
女同士で気が合わなかったら務まらないだろうし。
山上さん、他にも何か言ってたよな、人を採用する時の注意事項、何だったっけ。

思い出そうと自分の福耳を引っ張っていると、店の方から従業員の男の子が顔を出し、
「店長、面接の方がいらしてますが、お通ししていいですか？」
「ああ、いいよ。悪いけどしばらく店の方頼むわ」

はい、と言って彼は引込み、入れ替わりにスーツ姿の色の白い青年が、ぎこちない様子で入ってきて会釈した。

「初めまして、北村と申します。本日は宜しくお願い致します」
店長はテーブルの上の履歴書と顔を見比べ、
「いらっしゃい。どうぞ、ここに掛けて」
畏まって座った青年を正面から見る。

ごくフツの青年と言った印象。
中肉中背、顔立ちも特にインパクトの無い大人しそうな造り。髪も黒く普通の髪型。
履歴書の内容も可も無く不可も無く。
ピンと来ないなあ、と思いながら店長は名刺を差し出した。

店長

「えーと、北村くんは一人暮らしだね？募集要項に記載した通り、仕事は店の接客や商品の配送、清掃、その他諸々だね。小さい店だから何でもやってもらうけど大丈夫？あんまり待遇もいいとは言えないし」

「はい、大丈夫です。頑張りますので宜しくお願いします」

みんな最初はそう言うんだよな、と内心思ったが、そのまま店の仕事や待遇について説明を続けた。相槌を打ちながら聞いている青年は、真面目そうだが線が細く頼りなげだ。

まあ、この後二人面接してから決めればいいんだから。

店長が質問が無いかと聞いてみたところ、青年もごく一般的な質問を二三して、その後はこれと言って話も続かなくなった。

「じゃあね、もし採用と言う事になったら連絡するから。不採用の時は履歴書を返送します」

「分かりました。宜しくお願いします」

そう言って、彼は店長の名刺をどうしようか一瞬ためらった後、鞆から長財布を出して、そこにしまった。キャメル色の長財布は、この若者に不釣り合いな上等の品だった。

「君、それ...」

店長が右手の指先で、財布を指し示した。

「あ、失礼しました。ぼく、名刺入れを持っていないものですから、折れないように財布に入れようかと...」

「いや、どこにしまっても別に構わないけど、君随分いい財布持ってるねえ、牛革？」

「さあ、どうなのか...。これ新古品で買ったので、タグとか何も付いてなくて分からないんですよ」

青年は長財布をそっとテーブルに置いた。

「ちょっといいかい？新古品とはツイてるねえ君。こんな商売だから、そう聞くと気になるんだよ。ああ、これは山羊かもしれない。このマーク知ってるよ。イタリアの工房だ。日本じゃ知名度低いけど、手仕事の良さで有名なんだ。いいなあ。これはいい買い物だ」

店長は財布を撫で回し、ひっくり返して細かくチェックした。

仕事の事となると饒舌になるタイプだ。

しかも生き生きして、福耳の耳たぶが紅潮してきた。

そして店長の頭の中に、ふとあの山上さんの言葉が思い出された。

再就職

そうそう、大人の男なら靴と財布がポイントだったかな。

あまりにも貧乏だったリケチが染み付いているタイプは、この二つがボロボロで貧乏神が寄って来やすいから、店番には向かないとか。

店長はそっと北村の足元に目をやった。

新しくはないようだが、あまり傷んでいない黒の革靴はきれいに磨かれている。

店長は北村に財布を返してにっこり笑った。

絵本に出てくる大黒様そっくりの笑顔だった。

早いもので、ぼくがこの「リサイクルショップ福屋」で働き出して、もう一年近くになる。

収入は相変わらずカツカツだけれど、仕事は楽しい。

忙しく体を動かすのは案外と気晴らしになるものだ。

今まで勤めたところで、働くのが楽しいと感じた事は一度もなかったもので、それだけでも自分はツイていると思う。

毎朝、機嫌良く出勤して店長と奥さんに挨拶し店を開ける。

しばらくすると、ぼくが勤めだしたすぐ後に採用された、パートの女性が二人出勤してくる。

一人はご近所の主婦で、朝から午後までの勤務だ。

もう一人は前職のストレスで体を壊し、ここ一年ほど自宅療養していた若い女性で、週に三日ほどシフトに入っている。

全員揃ったら、店長から今日の仕事の指示が出る。相変わらず福々しい顔をしている。

ぼくが入った頃から店長は扱い商品を少し変えた。

以前は家具や家電がメインだったのだが、今は古着やアクセサリなどもミニ・コーナーを設けて扱うようになったのだ。

これらのセレクトに、女性二人のセンスが上手く生かされ、店内も華やいで見える。

「いやぁ、俺が面接して初めて大正解だったよ。本当に三人とも頑張ってくれて助かるわ」

ある日、ぼくが店長と近場の蕎麦屋で遅めの昼食を食べていると、嬉しそうに店長がそう言った。

「ありがとうございます。でも、それって以前は失敗が多かったって事ですか？」

「もう大失敗ばかりさぁ。何人に逃げられたか、もう覚えてないくらい」

店長の思い

「へえー、そんなに？」

「何が嫌かも言わないで辞められちゃうのが一番困るよな。対処の仕様が無くてさ」

「そうですねえ」

自分も前職で上司にキレてしまい、セキュリティカードをデスクに投げつけて、今日で辞めます！帰ります！とタンカを切った事は絶対言わないでおこうと思った。

話を逸らそうと思い、ミニ・コーナーの事に話を振った。

「あのミニ・コーナー、最近お客さんの評判良いですね。利益も大きめだし、これからどうします？」

「ああ、あれねえ。若い女の子達が店に来るようになってびっくりだわ。でも、あれはさあ…」

店長がくすつとにやける。

「あれは…？」

「北村君のお陰かもなあ」

「ぼくですか？ぼくは女性物とか分かりませんが」

「そうじゃなくてさあ。あの財布、まだ持ってる？」

財布と言えば一つしかない。例のキャメル色の革財布だ。

もう色がしっとりした飴色に変わりつつある。上着の内ポケットから出して見せた。

「これですか？」

「そうそう、それさあ。新古品で買ったって言ってたじゃない。いや、いいなあと思ってさ。俺もそんなの扱ってみたいなあと思ったんだよね。いつかはさ、ただのリサイクルショップじゃなくて、もっと質の良い物扱う店にしたい気もあるのよ」

店長はぼくの財布を夢見るような目で見つめている。

これから

すると、ぼくがこの仕事に就けたのは、この財布のインパクトのお陰なのか？

「これ家の近所にある骨董屋さんで買ったんですよ。そこのオーナー、白髪のおばあちゃんなんだけど、すごく味のある人でした」

「へえ、その店教えてよ。今度行ってみるわ」

「いいですよ。きっとあのお婆ちゃん、店長と話が合うと思います」

そうだ、ぼくも一度あの店に行ってみよう。

そして、まだ沢山じゃないけれど、この財布にお札を入れられるよう頑張ってますよって報告しに行こう。ついでに手頃な小銭入れでもあったら買ってこようかな。

蕎麦屋を出る時、レジの横に店員の身だしなみ用の鏡が目についた。

丁度ぼくの上半身が映っている。

ぼくは、この内ポケットに入っている、上等な財布に相応しい人間に成れただろうか。

経済的な豊かさでは、まだまだだろうけれど、幸いな事に仕事には恵まれ、生活は安定し、ちょっとだけ気持ち豊かな大人になったと自負している。

これからも一緒に頑張ってくれよと、ぼくは上着の上から財布を軽く撫でた。

財布がポケットの中で、それに応えてくれたような気がした。

可愛いペットの様に。

完

この作品はブログ「[白嘘物語](#)」に連載していた小説を、加筆修正したものです。

お読み頂き、誠にありがとうございました。
尚、ブログは2011年12月に別のアドレスに移行しています。
新しいブログは「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」です。

財布を飼う

<http://p.booklog.jp/book/13454>

著者：葉山ユタ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hayamayuta/profile>

発行所：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/13454>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/13454>